

社会技術研究開発事業
令和6年度研究開発実施報告書

「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」
「 演劇的手法を用いた共感性あるコミュニティの醸成
による孤立・孤独防止事業 」

虫明 元
東北大学 大学院医学系研究科 学術研究員

目次

1. 研究開発プロジェクト名.....	2
2. 研究開発実施の具体的内容.....	2
2-1. 研究開発目標.....	2
2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン.....	3
2-3. ロジックモデル.....	4
2-4. 実施内容・結果.....	5
2-5. 会議等の活動.....	21
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況.....	23
4. 研究開発実施体制.....	25
5. 研究開発実施者.....	27
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など.....	28
6-1. シンポジウム等.....	28
6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など.....	29
6-3. 論文発表.....	29
6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）.....	29
6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等.....	30
6-6. 知財出願.....	30

1. 研究開発プロジェクト名

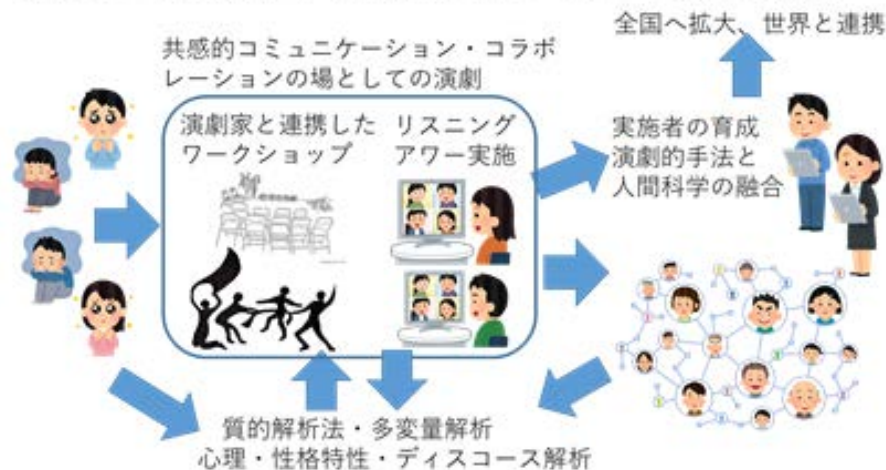
演劇的手法を用いた共感性あるコミュニティの醸成による孤立・孤独防止事業

2. 研究開発実施の具体的内容

2-1. 研究開発目標

スモールスタート期間では、地域の学校、大学、具体的には東北大学と宮城教育大学においてPoCの実践を行い、応用演劇と科学的人間理解を組み合わせた共感的コミュニケーション能力アップの授業を地域の演劇集団PLAY ART! せんだい、また全国の広いコミュニティに繋がりのある即興再現劇（プレイバックシアター）の関係者と企画を立案し、協働して実践を行う。そしてプロトタイプとなる活動を構築実践する。応用演劇のほか、プレイバックシアターが昨年のコロナ禍で開発した互いの経験したストーリーを語り合うリスニングアワー（LH）の活動も、互いが遠隔であってもできる活動であり、コロナ禍で対面、遠隔 ハイブリッドのいずれにも対応できるコミュニケーションワークショップを目指す。性格特性調査、参加者のフィードバックも含めながら多角的評価を行い、孤立・孤独と社会情動性スキルとの関連性を解明する。また人間形成に関わる質的調査も同時に行う。プログラムに関してはPDCAサイクルを繰り返しながら改善する。本格研究開発では、全国にいる即興再現劇の団体、リスニングアワー（LH）のガイドの資格の有る人を含めて、演劇関係者とのネットワークを活用しつつ、大学との連携を図り全国での活動展開を目指す。実は即興再現劇の団体は、北海道から沖縄まで全国の主要都市に存在するが、東北地区にはまったくない。ただ、仙台は劇都を標榜する都市でもあり、コミュニティには潜在的に演劇に関わる人材も多い。大学教育の中に演劇的手法を導入し、東北にも応用演劇による教育を根付かせ、さらに様々な分野でニーズのあるコミュニティに出前でワークショップを行っていく。教員を対象とする公開講座や県教育センターにおける研修を行い、実践者の育成を行う。応用演劇と教育との連携を様々なコミュニティに関して導入を広げる。そしてプロトタイプの活動モデルをコアにして全国の大学や関係者と連携することで大きな社会変容を目指していく。即興再現劇の持つ国際的なネットワークも活用すれば孤独・孤立への対応について、国際比較しながら研究を進める。

POC：演劇的手法による教育により共感的コミュニティの醸成
をおこない社会的孤立・孤独を生まない社会への変容を目指す



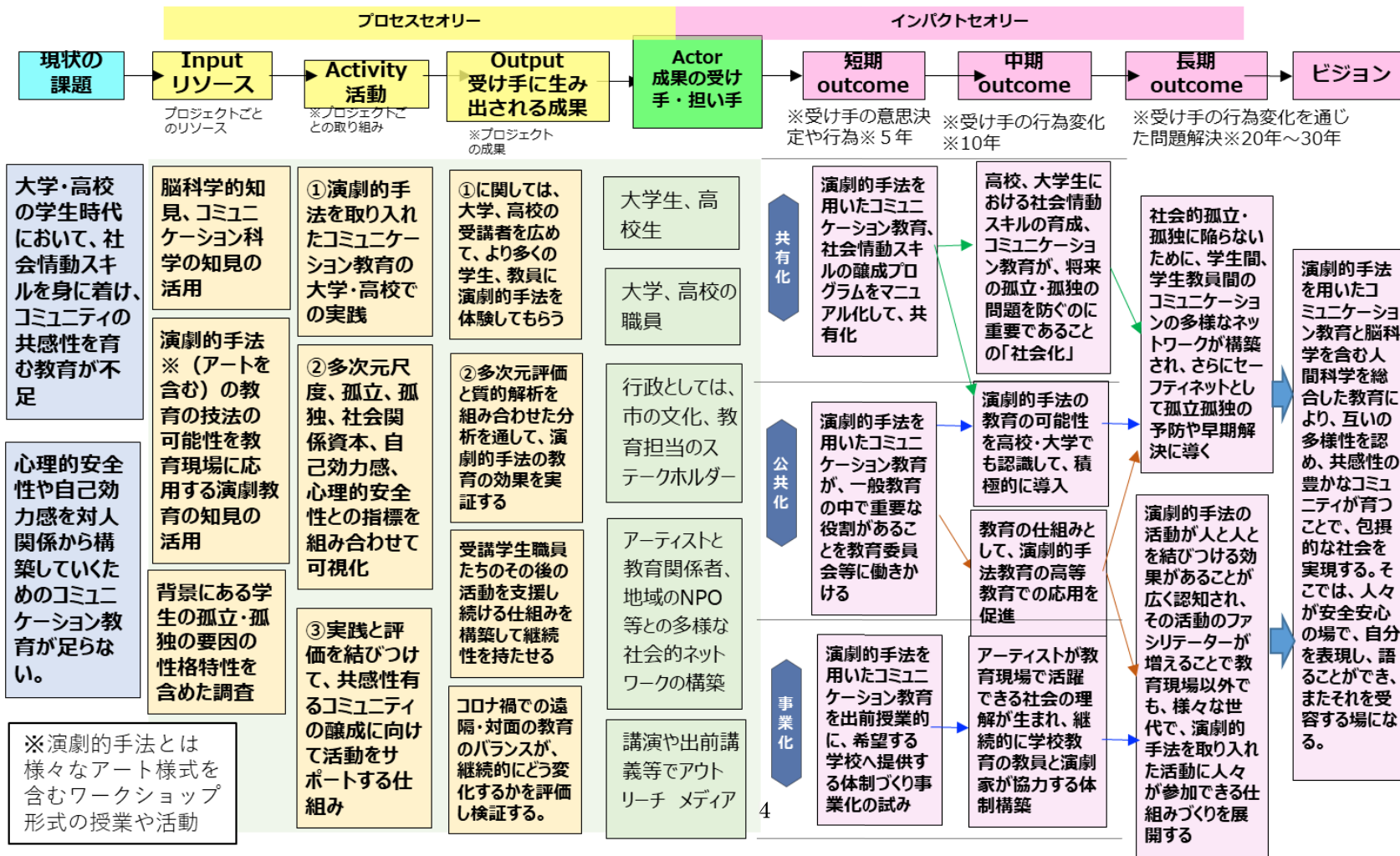
2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン

- Q1. 大学における孤立・孤独の現状と関連する多次元指標との関係性はなにか？
- Q2. 演劇的手法にはどのようなものがあり、グループの孤立・孤独と関連する社会情動性の指標にどのような効用や変化が認められるのか
- Q3. リスニングアワーと呼ばれる、各自の経験を話す遠隔での活動の孤立・孤独への影響はどのようなものか？
- Q4. 演劇的手法の教育を受けた人はどのような力を身に着けたと言えるのか？
- Q5. 教育現場に演劇的手法を取り入れていくときの、演劇というイメージが教員等の抵抗を生むボトルネックは、どのようにすれば解決できるのか
- Q6. 大規模言語モデルを用いた生成AI等の新しい技術は、演劇的手法の学びをそこに取り入れることで、どのような可能性があるのか？

2-3. ロジックモデル

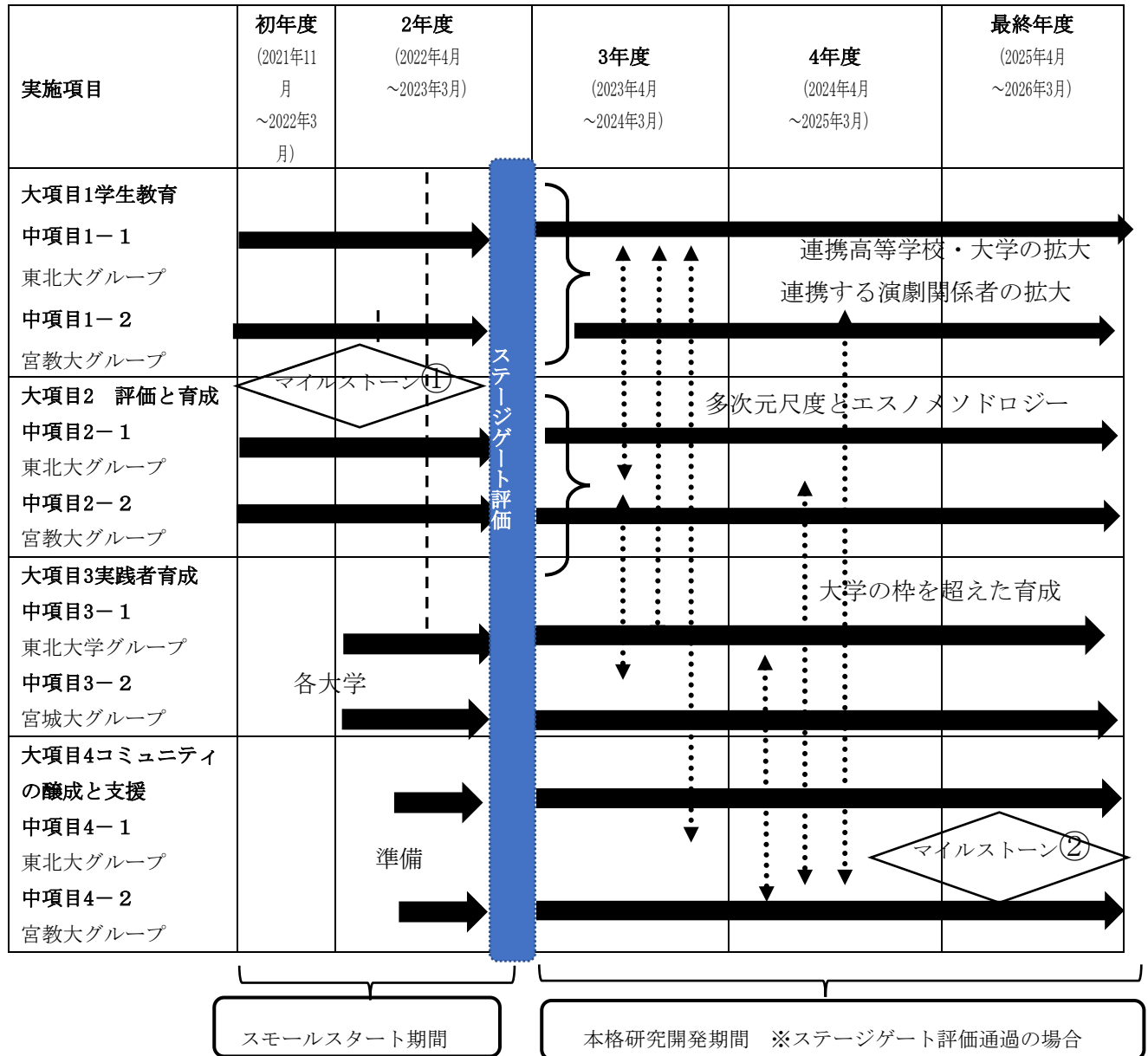
SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム (社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)

「演劇的手法を用いた共感性あるコミュニティの醸成による孤立・孤独防止事業」ロジックモデル



2-4. 実施内容・結果

(1) スケジュール



リスクヘッジ：項目1、3についていえば、学生の参加人数はワークショップの効果にも大きく関わることなので、過不足ないように適宜人数調整する。項目2は、質的調査に関することになるが、言葉そのものの分析を行うとともに、テキストマイニング等の質的研究手法も分析方法として検討する。項目3については継続性が保てるように前の実践者のグループから次の実践者への橋渡しをする。項目4は、コミュニティの対象の数や規模を調整する。ワークショップの実施対象を教育関係に特化しつつ、障害のある人へのケアの教育、福祉分野への教育などへと範囲を広げ、孤立・孤独に陥りやすいコミュニティへのコンサルティング等を行いながら調整する。

マイルストーン② 演劇的手法を用いたコミュニケーション教育によりコミュニティの共感性を育むプログラムを、ニーズのあるコミュニティに届けられるようにし、評価と分析によるエビデンスをもとに各コミュニティの醸成と支援が展開できるようにする。

(2) 各実施内容

令和6年度における研究開発の内容・進め方

■実施項目1：大学生教育に関わる社会情動スキルの育成

実施内容：演劇家との連携で、東北大学の一年生、宮城教育大学を対象としてワークショップを行った。

◎中項目1-1 東北大学全学教育における社会情動スキルと向社会性の育成

期間：令和5年4月—令和7年3月31日

実施者：虫明元（東北大学・学術研究員）

対象：大学初年次学生

東北大学全学教育の授業において、令和5年前期（2024年4-7月）の「多文化間コミュニケーション」では、プレイバックシアターによるワークショップ(6/1, 2)、豊唾の演劇家である庄崎隆志氏によるノンバーバルコミュニケーションワークショップ(6/24)を実施した。後期の「多文化PBL」では、庄崎氏のワークショップ(10/16)、里見まり子氏の即興ダンスのワークショップ(11/13)を、プレイバックシアターによるワークショップ(11/23, 24)を虫明元・虫明美喜が担当する「演劇的ワークショップ」の一環として行った。

また、リスニングアワーと呼ばれる遠隔で行う互いの経験を話す場を、上記の「多文化間コミュニケーション」では5回(2024/6/18, 20, 25, 27, 7/2)、「多文化PBL」でも5回(11/28, 12/5, 10, 12, 17)オンラインで実施した。研究協力者の一人である小森亜紀氏がリスニングアワーのガイドをつとめた。代表者虫明元、または虫明美喜が学生と共に参加し、その場のサポートを行った。

◎中項目1-2 宮城教育大学での社会情動スキルの育成

期間：令和5年4月—令和6年3月31日 実施者：虫明美喜（宮城教育大学・客員准教授）

対象：宮城教育大学学生

教育を目指す学生を対象として、外部講師との連携では、豊唾の演劇家の庄崎隆志氏のワークショップ(6/21, 10/11, 12)を行った。宮城教育大学の元教員でもある里見まり子氏の即興ダンスのワークショップ(11/16)は一般公開のワークショップとして、現職の小学校教員が多数参加する形での開催となった。このワークショップは音楽家の協力もあり、即興ダンス、即興音楽を含めたワークショップとなった。また会場が日立システムズホールでの開催となったため、舞台照明などにも工夫が施されたワークショップとなり、参加者にとっても貴重な体験をしてもらうことができた。

■実施項目2：社会情動スキルから見た孤立・孤独の評価方法と育成方法

実施内容：孤立・孤独の評価方法に関して多面的な評価の尺度を検討し、背景にある孤立・孤独の原因を解明した。

◎中項目2-1 社会情動スキルの多次元評価法の開発

期間：令和5年4月—令和8年3月31日

実施者：虫明元（東北大学・学術研究員）

対象 主に一般初年次学生

宮城教育大学グループ+プレイバックシアター+PLAY ART! せんだいと連携して行った事業への参加者に対して、性格特性、孤独、孤立指標としてUCLAの孤独感尺度、孤立に関してはルーベンのソーシャルネットワーク尺度、その他の指標についての調査を行い、それらの指標間の関連性を統計的に分析した。これまで行ってきた社会情動尺度として、孤独感、家族交流、知人交流尺度、クラス内知人、社会関係資本(ネットボンド、ネットブリッジ、リアルボンド、リアルブリッジ) 一般効力感(学力と関係)、社会効力感(対人関係)、愛着不安(対人関係不安)、愛着回避(対人関係回避)、共感化(心を読む力)、システム化(機構を理解する力)、心理的安全尺度(なんでも言える環境) 心理的安心感(安心できる環境) 以外にも、セルフコンパッション、自己開示性、本来性authenticityを新たに尺度として導入した。さらに、BEVI(Belief Event Value inventory)と呼ばれる国際尺度も本格的に導入した。

◎中項目2-2 教育的ワークショップでの社会情動スキルの育成方法の開発

期間：令和5年11月—令和8年3月31日

実施者：虫明美喜(宮城教育大学・客員准教授)

対象：教育を専門とする学生に対して、東北大学グループ+プレイバックシアター+PLAY ART! せんだいグループが連携して行った。庄崎隆志氏のノンバーバルコミュニケーションワークショップ、里見まり子氏の即興ダンスのワークショップ、バーバルとノンバーバル両面からの演劇手法を用いたPLAY ART! せんだいグループのワークショップ、さらに個人の体験したストーリーを演じるプレイバックシアターの演劇手法を比較して、それぞれがどのような社会情動性スキルを育成し、彼らの社会的コミュニケーション能力の育成に資するかを検討する。教育を目指す学生を対象として、社会情動スキル育成のための教育を演劇関係者との連携でおこなう。教育に活かせる演劇的手法を用いたワークショップによる教育方法の確立を行い、情報を共有する。

■実施項目3：コミュニティを指向した教育実践者・ファシリテーターの育成

実施内容：大学横断的に、さらに他地域の関心ある学生や教員にも門戸を開いてワークショップを開催して教育実践者・ファシリテーターを育成した。

◎中項目3-1 東北大学での実践者としての社会情動スキルの育成

期間：令和5年4月—令和8年3月31日

実施者：虫明元(東北大学・学術研究員)

対象：主に、東北大学およびその他仙台圏にある大学の学生およびその教員

学生、教員で、他を指導する立場に将来なり活躍したいと思う人々へ、集中的にコアとなるスキルを身につける演劇的ワークショップ(8/24, 25, 26)、および、ワークショップを行う場合に注意すべき儀式性や音や楽器の使い方(2025/3/1, 2, 3)、を開催し、仙台圏の学生、教員、さらには、北は八戸、南は九州からも関心のある教員が参加した。また、これまでこのようなワークショップに参加してきた学生、教員に声がけをし、継続的に練習会を実施し、対面では平均月一回のペースで(4/20, 5/18, 6/15, 7/20, 8/4, 9/28, 10/19, 11/16, 12/21, 2025年1/18, 2/8) また対外的な公演・ワークショップがあるときにはオンラインでもリハーサルを行い、これに対して虫明元・虫明美喜が指導を行っ

た。その中で、これらのメンバーがワークショップ実践者として、グループによる公演を東北大学の多文化クラス受講者及び関心ある学生に対して行った(6/1、11/23)。

◎中項目3-2 宮城教育大学での公開講座における社会情動スキルの育成

期間：令和5年4月—令和8年3月31日

実施者：虫明 元(東北大学) 虫明美喜(宮城教育大学)

対象：教育に関心のある教育関係者

日本地域看護学会に、昨年度一緒に活動した香川県立医療看護大学の教員と協力してワークショップを企画し、参加した。特に看護の教育にかかわる参加者が多く、これまでの演劇を用いた教育の成果を報告するとともに、ファシリテーターとして育成してきた学生グループによる演劇ワークショップの実演を行い、参加者の経験をその場で即興で演じた。これは参加者の強い関心を引き、その後実施した仙台での演劇ワークショップに新たな参加者が生まれた。

■実施項目4：演劇的手法を用いた共感性あるコミュニティの醸成と支援による孤立・孤独化防止推進

実施内容：ニーズのある様々なコミュニティに対して、応用演劇の演劇実践者との連携体制を作り、応用演劇の全国的なネットワークを活用して、共感性あるコミュニティを醸成することにより、人々のつながりを育み、孤立・孤独を防止する事業へと発展させる。大学生の授業の中ではリスニングアワーが孤立孤独に効果があることが、判明してきたので、全国のリスニングアワーのガイドで参加できそうな方に声をかけて、拡大版のリスニングアワーを全国で行った。また他地域の大学でも、演劇的ワークショップを行い、分野や大学の枠を超えての大きなコミュニティの醸成に資する活動を行った。

◎中項目4-1 演劇的手法を用いた包摂的コミュニティの醸成と支援

期間：令和5年4月—令和8年3月31日

実施者：虫明 元(東北大学・学術研究員) 虫明美喜(宮城教育大学・客員准教授)

対象：ニーズのある教育機関やコミュニティ

実施にはプレイバックシアターとの連携により、他地域の学校やコミュニティでリスニングアワーを用いて人とのつながりを醸成しようとしているグループに対して、支援することで活動を他地域へ拡大した。具体的には、2024年10月～12月までに、今年度は学生を対象としたリスニングアワーを本全国にいる10人のガイドが1回ずつ担当していただきリスニングアワーを実施した。リスニングアワーの参加者としては、各ガイドが持つ子育て支援やコミュニティ支援のフィールドを中心に集め、すべてのセッションを「つながり」「仲間」など共通のテーマで実施できるようコーディネートし、実践を支援した。講演会を積極的に実施した。令和6年度 全国肢体不自由児施設 施設長・事務長会議で「脳科学からみたコンパッションとケア ～DEIからウェルビーイングを考える～」(6/20)、その関係者からさらに、広島リハビリテーション研究会において「人間の発達過程(児童期～成人期)について ～脳神経科学の専門分野から」(11/30)というタイトルで演劇的手法がどのように人間の発達に有効であるかについて講演した。

◎中項目4-2 演劇的手法を用いた教育関係コミュニティの醸成と支援

実施者 虫明美喜（宮城教育大学・客員准教授）

対象 ニーズのある教育関連のコミュニティ

実施には宮城教育大学が、プレイバックシアター+PLAY ART! せんだいと連携して、他の地域でも演劇を医療関係者の育成に役立てる活動に関心のある人たち、今年度は日本地域看護学会（6/29 仙台）に、このプロジェクトで育成した若手の学生、職員をファシリテーターとして派遣し、演劇的手法によるワークショップを開催し、同時に演劇的手法を用いて参加者（看護師、保健師、医師等）を対象に公演を実施した。宮城県仙台向山高校（11/25・26）、宮城県東松島高校（5/24、6/21、9/20、2025/1/31）、宮城県仙台第一高校（7/24・29、12/26・27）、仙台育英学園高校（10/5、12/7）を中心に、演劇的手法の授業を各校でのカリキュラムの一環として組み込めるように支援を進め、PLAY ART!せんだいと協力し、虫明・虫明自身も講演やワークショップの講師を務めた。

（3）成果

■実施項目1：大学生教育に関わる社会情動スキルの育成

◎中項目1-1 東北大学全学教育における社会情動スキルと向社会性の育成

演劇的手法としては、通常の大学専門教育と異なり、安全安心の場で正解のない演劇表現をグループで活動することが共通して行い、後述のように社会情動性の育成に効果があった。特に個人のストーリーを演じるプレイバックシアターでは、互いの経験を共有し、演じることで、ストーリーを話した本人も他の学生からの共感を感じ取り、相互理解が進んだ。またこの過程で行ったリスニングアワー等で個人の話を参加者とゆっくり話す時間も孤独感低下に効果があった。これは全国版でのリスニングアワーでも同様であった。



◎項目1-2 宮城教育大学での社会情動スキルの育成

里見氏のワークショップ、庄崎氏のワークショップは、どちらもノンバーバルによるコミュニケーションが主であった。言葉を用いないことで、より身体表現による相互理解

が重要になっていた。そのことは、最初は言葉を封印することで困難を感じる学生もいるが、言葉を使わなくても一緒に演じたり、通じ合ったりする経験を通して、むしろ、表現の自由と言葉を介さないより直接的な表現での自己解放をむしろ快く感じているようであった。

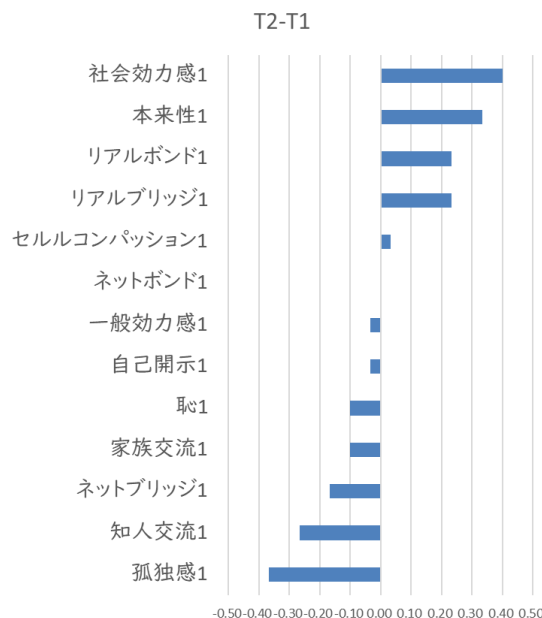
宮城教育大学での庄崎氏のノンバーバルコミュニケーションワークショップ(10/11)



■実施項目2：社会情動スキルから見た孤立・孤独の評価方法と育成方法

実施成果：演劇的手法による社会情動スキルの育成を社会情動尺度とBEVIとの解析を行うことで可視化した。

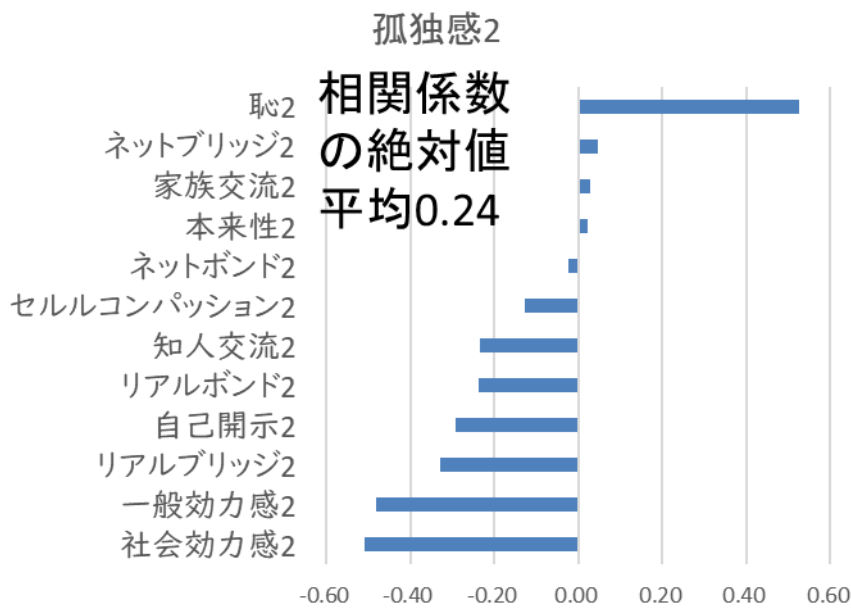
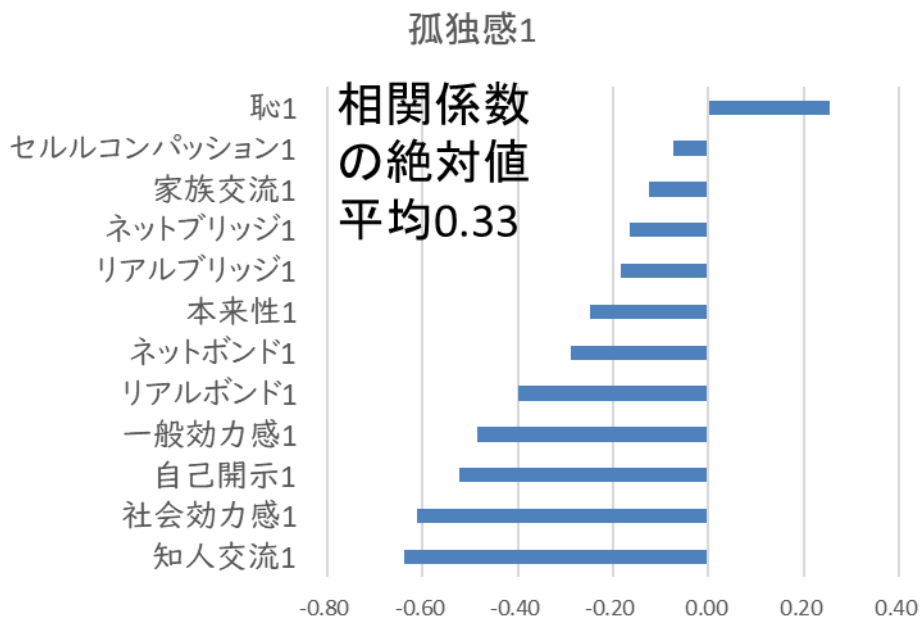
◎中項目2-1 社会情動スキルの多次元評価法の開発



演劇的手法を用いた授業前後での比較では、社会効力感、本来性、社会関係資本の増加が認められた。一方で孤独感は低下していた。意外だったのは、クラスのメンバーとは交流が深まっていたが、知人との交流は低下していたことである。孤独感とともに、本来性、

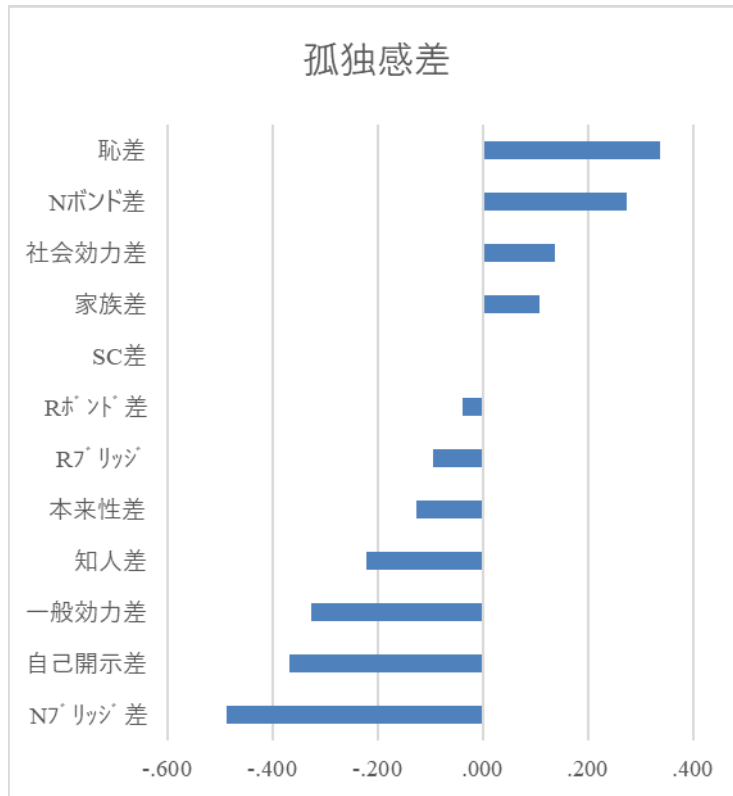
自己開示、恥等の因子の変化が認められた。授業前までは、社会関係資本と知人交流が孤独感と関係が深かったが、授業後では、社会効力感、一般効力感とが相関していた。これは、交流と孤独が反比例する一般傾向が授業前の状態では認められたが、授業後は、それらはむしろ因子として影響力は減少する結果、孤独感との相関は減り、それでも孤独感はある程度は残ることが分かった。おそらく人は生きていくときに全く孤独感がゼロにはならないのではないかと考えられた。

孤独感に対して、授業開始時と授業終了時で各社会情動性尺度との関係を調べた。



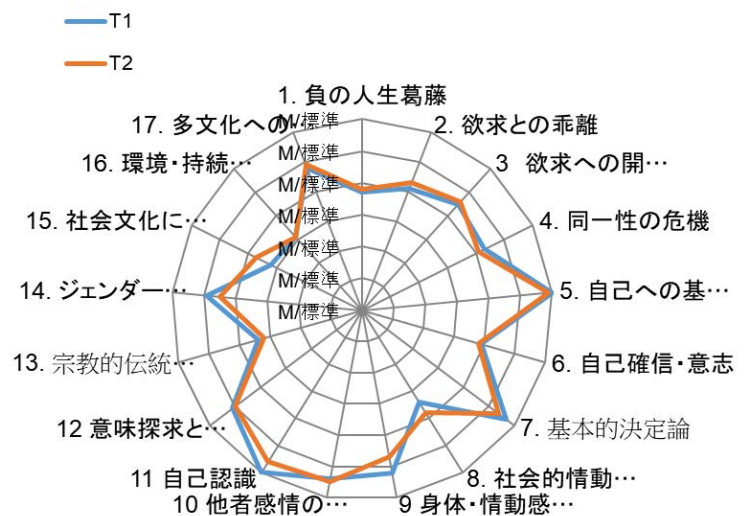
まずどちらの場合でも 孤独感と恥との関係が強い。海外での恥に関する研究から、様々

な過去のトラウマや差別等を経験から人は恥を内在化することが知られている。このことが例えば人が周りにいても孤独感を強めることになる可能性がある。一方で初期には知人との交流が孤独感に強く相反するが、終了時期ではそれほどではなく、社会効力感や自己効力感が孤独感と相反していた。

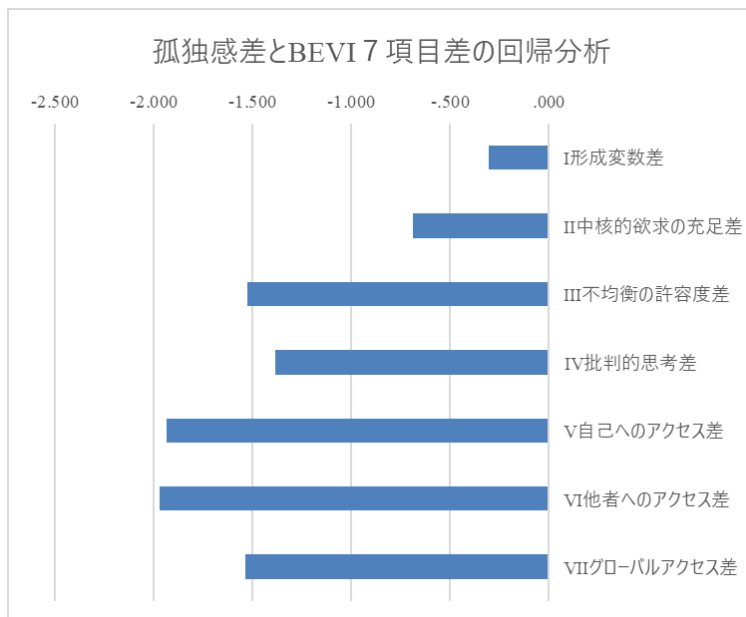
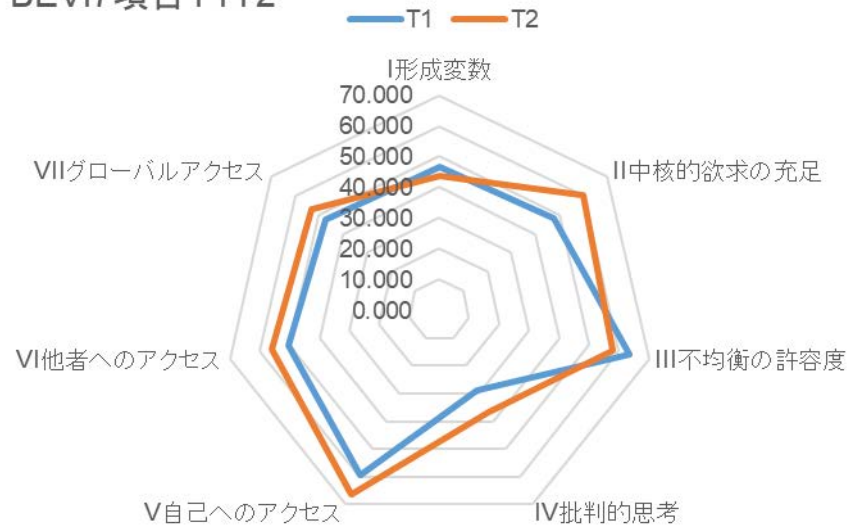


孤独感低下にかかわる因子を、それぞれの社会情動尺度の前後の差との回帰分析で行ってみると、社会関係資本と特にネットでブリッジング因子、自分の属しているコミュニティというより他のコミュニティとの交流や信頼関係の増加がかかわることが示唆された。また自己開示、本来性、対面での社会関係資本も孤独感低下にかかわっていることが示唆された。

次にBEVIの尺度を分析した。



BEVI7項目T1T2



中項目2-2 教育的ワークショップでの社会情動スキルの育成方法の開発

教育的ワークショップでの社会情動スキルの育成方法に関しては、言葉を用いた演劇的手法と言葉を用いない演劇的手法の双方が社会情動性の育成に関して相補的に効果的であった。言葉は表現を助けるが、しばしば、身体表現がおろそかになる傾向がある。言葉を用いないと、容易には意思を伝えにくいと感じるが、むしろ身体表現が大きくなり、両方をともに経験することで、バランスの良い社会情動性の育成が目指せる。里見氏のワークショップ、庄崎氏のワークショップは、どちらもノンバーバルによるコミュニケーションが主であった。またプレイバックシアターでは、個人の経験を話し、これを演じることで表現するが、言葉と身体表現とを両方をバランスして使うことで、アートとしても楽しめるし、また共感をより持てるようになっている。

現在の高等教育では、言葉での理解や表現にあまりに偏っているために、バランスの良い社会情動性をはぐくみにくいと感じた。学生たちに安全安心な場を提供し、そこで自発性を存分に発揮させることで、正解不正解によらない、自由な表現を身に着け、また他者を受容するような教育が可能になる。ある意味では、5歳の子供の時期に戻ったような体験に近い面もあるが、互いの経験を話し、演じる面では、他者の心の内を読む高度な認知的共感性が必要であり、青年期の学生にとっては貴重な体験であると思われた。

■実施項目3：コミュニティを指向した教育実践者・ファシリテーターの育成

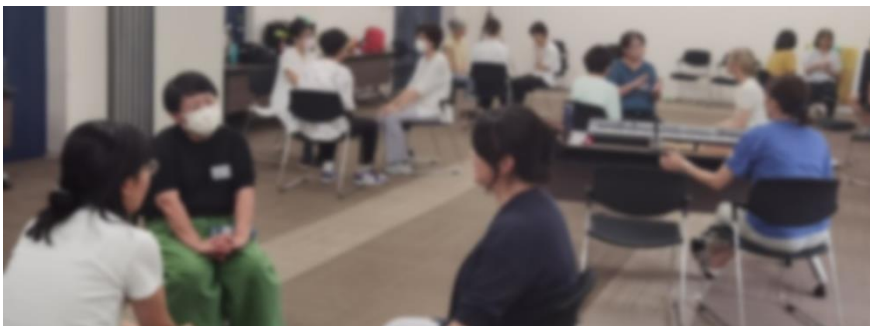
◎中項目3-1 東北大学での実践者としての社会情動スキルの育成

◎中項目3-2 宮城教育大学での公開講座における社会情動スキルの育成

実践者の育成、ファシリテーターの育成は、本格研究に入って、大学・学校の枠・学生と職員・教員の枠を超えているため、両者の項目を合わせて成果報告する。

実施結果

2024/8/23-25 教員、学生のための演劇的手法を身に着ける集中ワークショップ1



スクール・オブ・プレイバックシアター日本校によるワークショップには、学生、職員、さらには東北大、宮城教育大以外にも、日本の他地域の大学および学校の教員、社会人等が参加して、演劇的手法を教育に生かす技法を学び、また相互に意見交換を行った

一般向け庄崎氏のノンバーバルコミュニケーションワークショップ(10/12)



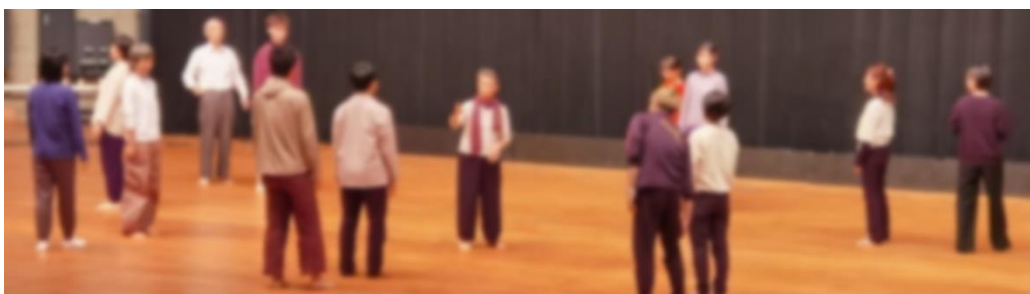
庄崎氏のワークショップは、学内（東北大、宮城教育大）以外にも一般参加者に公開する形でのワークショップとして実施した。車いすで参加する人、その他聴覚に障害を持った人も参加する包摂的なワークショップであった。

庄崎氏の演劇的ワークショップ@東北大(10/16)



大学での庄崎氏のワークショップでも学生たちは非常に明るい表情で演技に取り組んでいた。自己を開放する感覚が得られた、言葉でなくコミュニケーションをすることへの新しい価値観が得られた、身体で表現することの喜びが感じられた、などの感想が参加者から多く得られた。

里見氏によるダンスワークショップ@日立システムズホール(11/16)

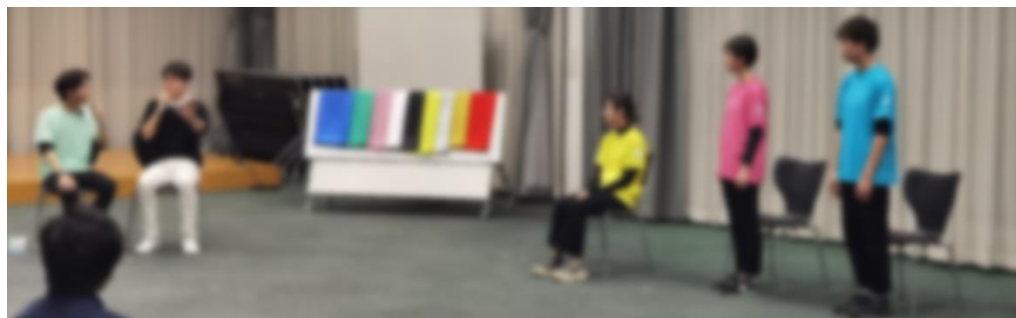


里見氏のワークショップは、音楽家の協力も得て、一般公開で行った。参加者としては、全国から集まった、主に現職教員が多かったが、ここでも特別な配慮の必要な障害を持った参加者、小学生等もともに参加した。参加者はファシリテーターの十分な配慮のもとに、共に活動ができ、最後には、それぞれがかかわっている教育についての意見交換も行うことができた。

プレイバックシアターの多文化PBLでの演劇的ワークショップ(11/23)



ワークショップ当日午後に行われた、ファシリテーターになった先輩たち（あおばプレイバックシアター）による演劇公演



向山高校でのプレイバックによるパフォーマンス (11/26)



多文化PBL受講生による日本語学校の留学生に対する演劇ワークショップ (12/18)



庄崎氏による、宮城教育大学初等教育課程の学生に対するワークショップ (6/21)

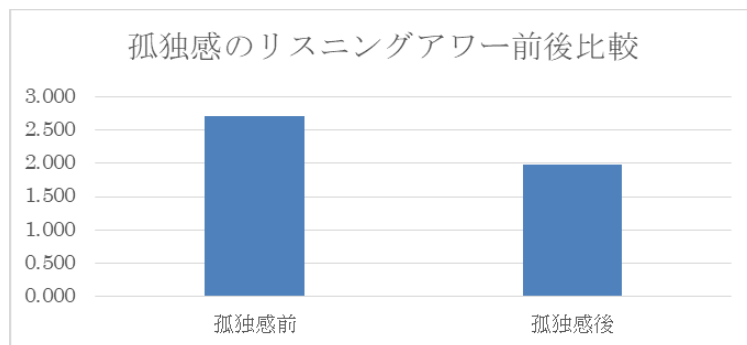


■実施項目4：演劇的手法を用いた共感性あるコミュニティの醸成と支援による孤独化防止推進

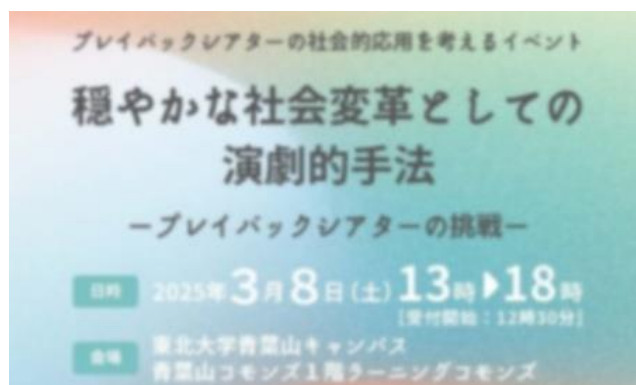
◎中項目4-1 演劇的手法を用いた包摂的コミュニティの醸成と支援

リスニングアワーの活動をニーズのある教育機関やコミュニティに広める活動を開始した。実施方法としてはスクール・オブ・プレイバックシアター日本校との連携により、リスニングアワーを通して、他地域の学校やコミュニティでリスニングアワーを用いて人とのつながりを醸成しようとしているグループに対して支援することで、この活動を他地域へと拡大した。

アンケートに協力していただいた参加者57名の分析から、優位に前後で孤独感が低下することが判明した。さらに 同時に行った各種の因子との孤独感変化との相関を分析したところ、社会関係資本のうち対面でのブリッジ因子、社会効力感、またもともと持っていた孤独感の大きさ、社会関係資本の対面でのボンド因子に応じて低下することが判明した。むしろ、孤立因子の知人交流、家族交流が高い人は、孤独感の変化は増加傾向になっていた。このことから、リスニングアワーは、孤立しがちの人ほど孤独感低下に貢献することが判明した。



2025年3月8日「穏やかな社会変革としての演劇的手法」というイベントを開催した。昨年度は、プレイアート仙台の関係の演劇活動を中心にしたイベントであったので、今回はプレイバックシアターに焦点を当ててスクールオブプレイバックシアターに運営を協力してもらい開催した。参加者は、北は北海道、南は九州、さらには海外ではウクライナ、カナダより参加者を集まった。まず、いじめ防止事業などを行っているプレイバックーズに公演をしてもらい、その後、シンポジスト4名の講演とパネルディスカッションを行った。大学教育での効果、看護教育での応用、ソーシャルワーカーの教育の中での応用、依存症者や犯罪経験者等のための生きなおしに応用している例が講演で紹介され参加者との活発な議論が行われた。またポスターセッションがあり、15のポスターにより、全国での応用事例が紹介され、それぞれに活発な意見交換がなされた。孤立孤独には、日本社会において各年代・各分野にさまざまなリスクを抱えた人たちがいて、その防止に関わる活動を行っている人たちもいる、ということが紹介された。その後、このプロジェクトから生まれた劇団、あおばプレイバックシアターの公演が行われ、参加者からのストーリーを演じて演技する人、話を語った人のみならず、そこで観客として参加した人々に共感の感じられる場となった。参加者同士の意見交換から、演劇的手法を用いている人やグループ間の横のつながりができた。海外、特にウクライナからの参加者、カナダからの参加者との意見交換によって孤立孤独の問題が海外でも課題であることが分かり有意義であった。



◎中項目4-2 演劇的手法を用いた教育関係コミュニティの醸成と支援

地域看護学会において、「プレイバックシアター×ヘルスヒューマニティズ×地域看護

ー互いのストーリーから学びあう共感性あるコミュニティづくりを目指して」というテーマで、演劇的手法を用いた看護教育の実践とその可能性を発表し、さらにこのプロジェクトで育った学生ファシリテーターによるワークショップのデモンストレーションを行った。学会参加者（看護師、保健師、医師、教育関係等）と意見交換をした。高校では、宮城県仙台南山高校、宮城県東松島高校、宮城県仙台第一高等学校高校、仙台育英学園高等学校を中心に、演劇的手法の授業を各校でのカリキュラムの一環として組み込めるように支援を進めた。

2024/6/29 地域看護学会での学生ファシリテーターによるワークショップデモ



このプロジェクトで育成したワークショップ参加者の学生、教員の参加者で構成された「あおばプレイバックシアター」が学会でワークショップを行い、演劇的技法のデモを行った。参加者の全国の看護関係の教員等にアピールでき、その後の活動にこの学会参加者も加わったり、またワークショップ実施の打診があるなど、ネットワークが広がった。

(4) プロジェクトのリサーチ・クエスチョンについて明らかになったこと

Q1. 大学における孤立・孤独の現状と関連する多次元指標との関係性はなにか？

回答文：以前までの結果では、孤立や社会関係資本と孤独感の関係性が認められ、その個人差が学年ごとに大きいことが示唆されていたが、さらに、恥、本来性、自己開示等と孤独感の関係も見えてきた。本来性 authenticity は特にウェルビーイングとの関係性も示唆されているので重要であるし、また自分が自分であることを認め、生きていけるという点では、孤立しても孤独感を感じない、ある種の孤高性、ポジティブな孤立の状態にもなりうるのではと考えている。また自己開示は安全安心の場で可能であり、この尺度は本人の特性でもあるが、環境と関係するものともいえる。恥は、海外では多くの研究があるが、人は成長の中でトラウマを経験すると、それは多くの場合自己を恥じる感情へと結びつくことが知られている。これは自己開示や本来性ともかかわり、孤独感とも関連する。

Q2. 演劇的手法にはどのようなものがあり、グループの孤立・孤独と関連する社会情動性の指標にどのような効用や変化が認められるのか

回答文：連携したアーティストにより効用効果に特徴がある事が判明した。具体的にはプレイバックシアター、Play Art! せんだい、里見氏、庄崎氏、それぞれに特徴が認められた。すなわち、饜唾の演劇家の庄崎氏のワークショップでは、ノンバーバルコミュニケーション、身体表現が強調され、学生からのコメントにもそれが反映されていた。里見氏は即興ダンスの手法で、オリジナルの道具を使いながらも、基本的には言葉を使わないで演技をおこない、ノンバーバルコミュニケーションないしはインプロビゼーション・ダンスという即興的な身体表現が実践内容に含まれていた。PLAY ART! せんだいは、さまざまなシアターゲームを組み合わせつつも、対象の学生や学校の先生とのプレコンサルテーションを行い、グループ創作などを行い、グループ内での合意形成のためのコミュニケーションを通して、互いに関係性を深める効果があった。

特にプレイバックシアターでは、参加者の経験した話を聴き、即興で演技するという
ことで、互いに自分自身の経験を聞いたあと、何の段取りもなく即興で行うことは難しいが、
短い時間で互いの経験を共有し合うことで、参加者の関係性が築かれた。またリスニング
アワーでは、5-6人が遠隔で集まり、自分の経験談を互いに話す。特徴としては何の判
断も分析もすることなく互いに傾聴し、また自分の話をすることで、自己開示が徐々に進
み、しかも最後のガイドの振り返りで、参加者の話が一つのストーリーとして語られる。
参加者は互いの話を通してお互いの理解を深め、「交流」という点が特徴的であった。
演劇的手法と言っても、ノンバーバルで身体的な活動と、逆に身体表現を持たないストー
リーだけの活動と幅があることが、種々の手法を取り入れたことにより、よく理解するこ
とができた。

コミュニケーションには、バーバルとノンバーバル2つの側面が重要であり、それぞれ
に特に焦点を当てた経験を通して、その両者の特徴や重要性が学生はよく理解できたよう
であった。

Q3. リスニングアワーと呼ばれる、各自の経験を話す遠隔での活動の孤立・孤独への影響は
どのようなものか？

回答文：リスニングアワーは、家族交流、知人交流の少ない人ほど孤独感低下がみられて
いた。また、社会関係資本のうち対面でのブリッジ因子、社会効力感、またもともと持っ
ていた孤独感の大きさに応じて効果があることも判明した。このことから、孤立しがちな
人へのリスニングアワーの実践は、孤立・孤独防止に貢献すると期待できる。

今回は特に、本来性、自己開示という尺度も含めて評価すると、これらがリスニングア
ワー前後での孤独感の変化とかかわることが判明した。安全安心の場合、本来性、自己開示、
孤独感はそれぞれ互いに相関しあっており、これらすべてを満たせるような場の醸成望ま
れる。

Q4. 演劇的手法の教育を受けた人はどのような力を身に着けたと言えるのか？

回答文：演劇的手法のワークショップや授業での変化が、本来性、自己開示、社会関係資
本、社会的効力感等の多くの尺度によって評価され示唆されていることは、個人の能力と
いうよりは、社会的能力とでもいうべき能力である。なぜなら、ファシリテーターとなっ
た学生は、他の大学、高校、後輩に向けてのワークショップを行うことで、単に個人の能
力でなく、他者へのサービスとしての演劇的手法を実践できるからである。エリクソンの
発達理論ではジェネラティビティが育っているといえると考えられる。

Q5. 教育現場に演劇的手法を取り入れていくときの、演劇というイメージが教員等の抵抗を
生むボトルネックは、どのようにすれば解決できるのか

回答文：これまでの孤立孤独のプロジェクトでの実績に加えて 定量的な分析、脳科学的
な意義等の説明を行うことで、教員等の演劇への抵抗感はある程度解決できることがわか
ってきた。しかし、学生自身にもそれを理解してもらうためには、演劇という、それぞれ
が幼少時から持っている固定的なイメージにとらわれない、より自然な人間教育の手法と

して定着を図るべきかもしれないと考えている。実際、安全安心の場で、自発性を発揮し、自由に自己表現できることを体験すると、学生はそれが何という技法の教育かということよりも、まずは楽しいと思う体験として腑に落ちるようであるからである。

Q6. 大規模言語モデルを用いた生成AI等の新しい技術は、演劇的手法の学びをそこに取り入れることで、どのような可能性があるのか？

回答文：本プロジェクト協力者のメンバーの中に、演劇的手法にも経験があり、かつ大規模言語モデルを用いた、AI教育に関するソフト開発者があり、定期的に交流している。実際に、AIを用いた対話システムにより、教育場面で、疑似的なシミュレーションの体験ができ、さらにある種の即興性による毎回少し異なる対話が生まれるようにすることが可能になっている。また言語以外のモダリティへのAIの理解も可能になってきているので、AIにおいて、状況や文脈依存的に、対話が生成でき、さら対話が記録されることで、対話の振り返りが可能になっている。対話における、自分の特徴を自ら振り返ることは、対話能力の育成につながる可能性が期待できる。また、教員が多様な学生に個別対応が難しい状況でも、AIが間に入ることで、疑似的に個別対応できるコミュニケーション教育システムになる可能性がある。

2-5. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2024/4/20	演劇的手法のPJ内ミーティング	星陵地区セミナー室	演劇的手法の練習とミーティング
2024/5/18	演劇的手法のPJ内ミーティング	星陵地区セミナー室	演劇的手法の練習とミーティング
2024/6/1	演劇的手法のPJ内ミーティング	星陵カンファレンスルーム	多文化間コミュニケーション授業補助、公演実施
2024/6/2	演劇的手法のPJ内ミーティング	星陵カンファレンスルーム	公演振り返り、練習・ミーティング
2024/6/15	演劇的手法のPJ内ミーティング	星陵地区セミナー室	演劇的手法の練習とミーティング
2024/6/21	演劇的手法のPJ内ミーティング	星陵地区セミナー室	演劇的手法の練習とミーティング (地域看護学会発表に向けて)
2024/7/20	演劇的手法のPJ内ミーティング	星陵地区セミナー室	演劇的手法の練習とミーティング
2024/8/4	演劇的手法のPJ内ミーティング	星陵地区セミナー室	演劇的手法の練習とミーティング
2024/8/24-26	演劇的手法のPJ内ミーティング	星陵会館大会議室	コアトレーニング(第6期)参加、演劇的手法の練習・公演
2024/9/28	演劇的手法のPJ内ミーティング	星陵地区セミナー室	演劇的手法の練習とミーティング

2024/10/19	演劇的手法のPJ 内ミーティング	星陵地区セミ ナー室	演劇的手法の練習とミーティング
2024/11/16	演劇的手法のPJ 内ミーティング	星陵地区セミ ナー室	演劇的手法の練習とミーティング
2024/11/23	演劇的手法のPJ 内ミーティング	萩ホール	多文化間PBL授業補助、公演
2024/11/24	演劇的手法のPJ 内ミーティング	星陵地区セミ ナー室	公演振り返り・練習・ミーティン グ
2024/12/21	演劇的手法のPJ 内ミーティング	星陵地区セミ ナー室	演劇的手法の練習とミーティング
2025/1/18	演劇的手法のPJ 内ミーティング	星陵地区セミ ナー室	演劇的手法の練習とミーティング
2025/2/8	演劇的手法のPJ 内ミーティング	星陵地区セミ ナー室	演劇的手法の練習とミーティング
2025/3/1—3	演劇的手法のPJ 内ミーティング	萩ホール	ST「音楽とリチュアル」参加、演 劇的手法の練習とミーティング
2025/3/8	演劇的手法のPJ 内ミーティング	東北大学青葉 山 commons	プレイバックシアター全国版イベ ントでの公演発表

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

研究開発成果の様々な現場での試行的な利用や社会実験の取り組みに関してこれまで行っていることを列挙する。

- 1) これまでは、東北大学、宮城教育大学での学生と職員を主な対象としてきたが、他の大学や専門学校に対象を広げている。東北福祉大では次年度2025年度に集中講義の形で演劇的手法を用いたワークショップ形式の授業を導入する。また八戸の看護専門学校においても、看護教育の一部に演劇的手法を導入することを試みている。
- 2) 仙台の日本語学校に在籍する留学生に対して、大学で演劇的手法を用いて教育を受けた学生に、プロジェクトとして多文化交流を提案してもらい、自ら学んだ演劇手法を用いて交流授業を企画した。日本人学生との交流を通して留学生には教室内ではなかなか学ぶことのできない、同世代の生きた日本語を学んでもらい、さらに、孤立孤独防止にもつながる活動を始めている。また、この学校の留学生には、庄崎氏によるワーク



ショップも体験してもらい、包摂的な社会を作る一員としての「多文化」に触れてもらう機会とした。現代日本には本当に多くの海外からの人々が来日し、定着しているが、日本人と在日外国人とが理解しあう場は少ない。包摂的な社会を目指すときに演劇的手法による交流は、非言語的な社会情動的も含む全人的な交流となるために、その効果が期待される。

- 3) いくつかのワークショップでは、身体障害者、配慮の必要な学生等の参加もあり、これらの対応も健常者と同じフラットの関係で行えるワークショップとして参加者のバリアフリーな環境を醸成する演劇的手法の可能性があると感じている。
- 4) 各演劇的手法を取り入れながら、それぞれの演劇的手法の特徴も見えてきた。対象者等に合わせて、どのように演劇手法を選び、導入するかは、その都度新規な分野では試験的な要素があるが検討するための知見は積みあがってきていると感じている。演劇的手法は、人の多様性を包摂しながら互いの人間性が表現され受容されることが基本にあるので、どの分野、対象者にも将来の展開の可能性があると感じている
- 5) 国際比較に関しては、BEVIという国際尺度を導入したおかげで、この尺度の開発者とじかに知り合う機会を得て、オックスフォードからの書籍のひとつの章に脳科学的な観点も含めて寄稿するように依頼があった。この尺度は多言語に対応し、人間の価値観、信念等の評価としては多次元であり、これらと社会情動性を比較しながら進めることで、日本の現状を国際的な視点からも比較検討することも将来可能性があるかもしれないと期待はしている。
- 6) 脳科学的な観点から孤立孤独を含む人間理解が、この数年のプロジェクトでの多次元尺度から示唆されつつある。この点を演劇的手法による経験的学びと、人間科学に

よる学びを組み合わせる試みは、プロジェクト初期から行ってはいるが、今後、このプロジェクトを、年齢層、社会的多様性を含めた新規分野での展開のための基盤づくりを行えるのではないかと、書籍化を行おうとしている。

4. 研究開発実施体制



(1) 東北大学グループ (虫明 元)

東北大学大学院医学研究科

項目1：大学生教育に関わる社会情動スキルの育成

東北大を中心に、学生に対して演劇関係者との連携で社会情動スキルを育成する実践者のプログラムを開発し実践する (中項目1-1)

項目2：社会情動スキルから見た孤立・孤独の評価方法と育成方法

社会情動スキルの観点から孤立・孤独の評価と原因を解明する (中項目2-1)。

項目3：コミュニティを指向した教育実践者・ファシリテーターの育成

東北大を中心にコミュニティの指向を持った実践者の育成を行う。演劇関係者との連携で社会情動スキルを育成する実践者のプログラムを開発し実践する。(中項目3-1)

項目4：演劇的手法を用いた共感性あるコミュニティの醸成と支援による孤独化防止推進

即興再現劇の全国のネットワークを活用し、ニーズのあるコミュニティへ演劇家とのパフォーマンスを行い、同時にそのためのファシリテーターになる人材を育成する。(中項目4-1) プロジェクトにおける本グループの位置づけ

宮城教育大学、即興再現劇チーム、PLAY ART! せんだいと連携して実施する。

(2) 宮城教育大学グループ (虫明 美喜)

宮城教育大学国語教育

項目1：大学生教育に関わる社会情動スキルの育成

宮城教育大を中心に、学生に対して演劇関係者との連携で社会情動スキルを育成する実践者のプログラムを開発し実践する (中項目1-2)

項目2：社会情動スキルから見た孤立・孤独の評価方法と育成方法

社会情動スキルの育成方法と孤立・孤独の評価とを関連付け原因を解明する (中項目2-2)。

項目3：社会情動スキルを持った教育実践者の育成

スモールスタートでは宮城教育大を中心に希望する学生や、若手教員を中心に、演劇関係者との連携で社会情動スキルを育成する実践者のプログラムを開発し実践する。その後本格研究では教育関係のコミュニティでの実践者の育成を行う (中項目3-2)

項目4：演劇的手法を用いた共感性あるコミュニティの醸成と支援による孤独化防止推進

演劇的手法を用いて教育関係コミュニティの醸成と支援をおこなう。(中項目4-2)

5. 研究開発実施者

東北大グループ（リーダー氏名：虫明 元）

研究代表者 氏名	所属	役職 (身分)	エフオ ート	役割
虫明 元	東北大学 医学部	学術研究 員	20%	統括／企画検討ワークショップの設 計・実施
研究実施者 氏名	所属	役職 (身分)	エフオ ート	役割
大城 朝一	東北大学医学部	助教		実施支援と特性評価分析
渡辺 秀典	東北大学医学部	助教		実施支援と特性評価分析
梶田祐貴	東北大学医学部	助手		実施支援と特性評価分析
研究補佐員	東北大学医学部	事務員		実施支援と特性評価分析

宮教大グループ（リーダー氏名：虫明 美喜）

グループ リーダー 氏名	所属	役職 (身分)	エフオ ート	役割
虫明美喜	宮城教育大学	客員准教 授	20%	企画検討ワークショップの設計・実施
研究実施者 氏名	所属	役職 (身分)	エフオ ート	役割
津田 智史	宮城教育大学	准教授		事後コメント等の質的分析・評価
松崎 丈	宮城教育大学	教授		学内外ワークショップの計画・実施・ 評価への協力

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要
2024年6月23日	庄崎隆志氏によるノンバーバルコミュニケーションワークショップ	虫明元 虫明美喜	東北大学 萩ホール	15人	言葉を使わない演劇手法でのワークショップと参加者との意見交換
6月29日	日本地域看護学会第27回学術集会	岡田真理、虫明元、虫明美喜	アエル仙台	20名	ワークショップを行い講演、演劇のあおばによるデモと意見交換
7月26-28日	ウェルビーイング研修体験ワークショップ	クオレ・シー・キューブ	長野県 飯綱高原	15名	ワークショップにて脳科学的コメンテーター
8月24-26日	プレイバックシアタコアトレーニング-	プレイバックシアター日本校	東北大学医学部	20名	演劇的ワークショップと意見交換 運営
10月 - 11月	学生のためのリスニングアワー全国版	プレイバックシアター日本校	zoom	60名	全国のリスニングアワーのガイドによる全国の学生のためのリスニングアワー
11月16日	里見まり子、つながるからだ、つながる動きワークショップ	虫明元、虫明美喜	日立システムズホール仙台	20名	演劇的ワークショップと意見交換
2025年2月28日 3月2日	プレイバックシアターST2リチュアルと音楽	プレイバックシアター日本校	東北大学 萩ホール	20名	演劇的ワークショップと意見交換 運営
3月8日	「穏やかな社会変革としての 演劇的手法」	虫明元 虫明美喜	東北大学 青葉山ラウンジコモンズ	70名(北海道から九州、四国、海外はカナダ、ウクライナ)	演劇的手法を用いた孤立孤独防止に関する事例紹介や効果に関しての口演、ポスターおよびプレイバックシアターの公演 (プレイバックアーツとあおば)

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、フリーペーパー、DVD

- ・高橋洋(翻訳), 虫明元(解説) (原著:ゲオルク・ノルトフ)意識と時間と脳の波:脳はいかに世界とつながるのか 白揚社 2024年11月19日 (ISBN: 4826902646)
- ・虫明元(担当:分担執筆, 範囲:第六章 演劇的手法を用いた教育実践・社会課題に挑戦する) 新しい途を拓く 第6章 東北大学教養教育院叢書「大学と教養」第8巻 2025年3月 (ISBN: 9784861634062)

(2) ウェブメディアの開設・運営

- ・宮田満のバイオ・アメイジング(ウェブ配信YouTube) 2024年11月26日にて「ひらめき脳を解き明かせ (https://www.youtube.com/watch?v=UR_DvIH4BcQ)」講演と対談 虫明元

(3) 学会(6-4.参照)以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- ・虫明元 虫明美喜 スクール・オブ・プレイバックシアター日本校 主催によるイベント「穏やかな社会変革としての 演劇的手法」 東北大学 青葉山ラーニングcommons 2025年3月8日 70名参加(北海道から九州、四国、海外はカナダ、ウクライナ)
- ・明和政子、虫明元、石井英真、武藤久慶 「AI共生時代に必要となる人類の知性とそれを育む教育の対談」パネリスト、情報提供ひと・健康・未来研究財団 2024年8月13日

6-3. 論文発表

(1) 査読付き(0件)

- 国内誌(0件)
- 国際誌(0件)

(2) 査読なし(0件)

6-4. 口頭発表(国際学会発表及び主要な国内学会発表)

(1) 招待講演(国内会議 4件、国際会議 0件)

- ・虫明元「脳科学からみたコンパッションとケア ~DEIからウェルビーイングを考える~」令和6年度 全国肢体不自由児施設 施設長・事務長会議 福島県いわき市 2024年6月20日
- ・虫明元 「脳科学からコミュニケーション教育とウェルビーイングを考える」SGグループ研修会 仙台市 2024年8月31日
- ・虫明元 「人間の発達過程(児童期~成人期)について」~脳神経科学の専門分野からの一考察~ 広島リハビリテーション研究会 広島市 2024年11月30日
- ・虫明元「脳科学を認知症ケアに活かすーコミュニケーションは認知症ケアの基本」認知症とケア 前橋市 公益財団法人老年病研究所 2025年2月15日

(2) 口頭発表 (国内会議 2 件、国際会議 0 件)

- ・ 虫明元、虫明美喜「脳科学的な視点からみたプレイバックシアター ～ヒューマニティーへの多様な効果と共感性～」日本地域看護学会第27回学術集会 仙台市2024年6月30日
- ・ 虫明元、虫明美喜 脳科学から見たプレイバックシアターの効果検討 イベント「穏やかな社会変革としての演劇的手法」 主催 虫明元 虫明美喜 スクール・オブ・プレイバックシアター日本校 東北大学 青葉山ラーニングコモンズ 2025年3月8日

(3) ポスター発表 (国内会議 2 件、国際会議 0 件)

- ・ 虫明元、虫明美喜「脳科学からプレイバックシアターの効果を検討する」 イベント「穏やかな社会変革としての演劇的手法」 主催 虫明元 虫明美喜 スクール・オブ・プレイバックシアター日本校 東北大学 青葉山ラーニングコモンズ 2025年3月8日
- ・ 虫明美喜、虫明元「大学生を中心としたプレイバックシアターグループの設立とその活動ー演劇的手法×教育を未来につなぐー」 イベント「穏やかな社会変革としての演劇的手法」 主催 虫明元 虫明美喜 スクール・オブ・プレイバックシアター日本校 東北大学 青葉山ラーニングコモンズ 2025年3月8日

6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿 (3 件)

- ・ 河北新報 夕刊 2024年4月8日 とびらをひらく「演劇教育事例・報告孤立・孤独防止に効果」 演劇を用いた孤立孤独防止の効果と宮城県の高校での実践例を紹介 特にPLAY ART! せんだいの実践例の紹介記事
- ・ 毎日新聞 2024年4月18日 新聞・雑誌 サルの脳に足し算・引き算細胞を発見 ヒトの脳にも関連か 毎日新聞は孤立孤独防止の活動紹介記事とナラティブということで2回取り上げていて、今回は認知機能の研究者として紹介

(2) 受賞 (0 件)

(3) その他 (0 件)

6-6. 知財出願

(1) 国内出願 (0 件)

(2) 海外出願 (0 件)